



二つの言語のはざまを生きた李箱

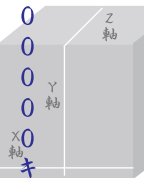
十三人の子供が道路を疾走する。

（道は行き止まりの路地が適当である。）

〔詩〕 烏瞰圖 詩第一号

僕は大きく一度伸びをして、妻の枕を取って頭を乗せ、ごろりと横になり、こんなにも安らかな楽しい歳月を神様にたっぷり自慢してやりたかった。僕は本当に世の中の何物とも没交渉なんだ。神様だって、僕を褒めることも叱ることもおどきにはなるまい。

〔小説〕 翼

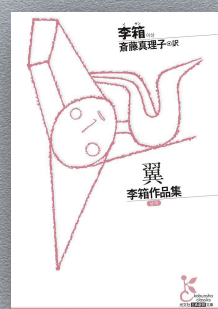


速度 0.5 の統制例へば秒毎三〇〇〇〇〇キロメートル逃げる
ことが確かなら人の発明は秒毎六〇〇〇〇〇キロメートル逃
げられないことはキツトない。

〔日本語詩〕「線に関する覚書」

1910年に日本統治下の朝鮮に生まれ、1937年、東京で客死した李箱（イ・サン）。「早すぎたモダニスト」と称される詩人、作家が二言語のあいだでどのような葛藤をしていたのか、李箱の翻訳を手がけた翻訳家斎藤真理子さんに、ご講義いただきます。

聴講希望の方は、李箱『翼 作品集』（斎藤真理子訳、光文社古典新訳文庫、2023年）を読んだうえでの参加をお勧めします。



進行 阿部賢一（東京大学）

日時 2024年12月11日(水) 16時50分～18時35分

会場
法文1号館2階216教室

主催 東京大学文学部／人文社会系研究科現代文芸論研究室

問合せ先 genbun@l.u-tokyo.ac.jp